

## 映画「わたしの季節」を鑑賞

メル友に声をかけていただき、映画「わたしの季節」を山形ドキュメンタリーフィルムライブラリー金曜上映会での上映・鑑賞に行ってきた（夜、1時間足らずで山形へ映画鑑賞というのも、高速道路整備網のお陰か）。

この映画は、第二びわこ学園の重症児を対象とした「夜明け前の子どもたち」、西多賀病院の筋ジスを対象とした「僕の中の夜と朝」等の長編療育記録映画：柳沢寿監督（若い頃の自分に「文明の発達とはどういうことか」を気づかせてくれた人）が「福祉」を映像で問いつづけたおり、助監督をしていた小林茂監督の作品である。

「重い『障がい』をもちながら生きている人びとの人としての『存在感』と『こころの声』をよりどころに、いのちの根源を見つめようとした作品（第59回（2004年）毎日映画コンクール記録文化映画賞を受賞）」であった。

それにしても、再び撮影舞台を提供した第二びわこ学園の存在と伝統は凄い！

鑑賞してまず、「重症心身障害児」という呼称が、相変わらず40年前と全く同じ「行政的呼称概念」に過ぎないことを改めて感じた。

重症児の福祉行政、療育のこの40年間は、一見進んでいるように見えるが、彼らの「存在感」と「こころの声」が、周りに届かないというより、周りの意識に左右されてるシーンもあり、彼らの視線からのその根源的な問題は、何も進んでいないようで、愕然とせざるを得なかった。この映画は、声高でないがそのことを気づかせようとしてるようにも思えた。

一方、40年近く前に「夜明け前の子どもたち」を鑑賞し、また「僕の中の夜と朝」の撮影現場に立ち会ったが、こうした映画を鑑賞する視点が、つくづくこの40年間に異なっている自分の時間の長さを感じつつも鑑賞した。

この40年の間には教育、療育活動等の今は、双方向性や相互作用、関係論の中で見直しもなされてきており、そうした取り組みの視点からの検証シーンが少なかつただけに、障害児・者と現場で係わり、相互作業の視点から取り組む仲間を知る自分としては、少々もの足りなさも感じた。

この映画は、自主上映のスタイルだけに、仙台ではいつどこで鑑賞する機会があるかどうか分からないだけに、声をかけて下さり、いち早く鑑賞の機会を作って下さったメル友に感謝している。

自分は、こうしたメル友等との関係論の中で育てて貰っていることを実感した昨夜でもあった。

（2005年6月25日 記）

## 映画のはじまり

「40年間生きてきたことを映像として残せないだろうか」

5年前のこの1本の電話から、映画『わたしの季節』は始まりました。第二びわこ学園が老朽化にともない新築・移転する計画がすすんでいるというのです。40年の歴史をもつ「びわこ学園」は西日本で最初に開設された重症心身障害児(者)療育施設です。

学園を知って30年になります。20年前には、彼らの7泊8日の琵琶湖一周歩行を撮影し、写真詩集『ばんぱかばん』として出版。写真を始めて間もない頃です。学園での体験はずっとこころの底にはりつきました。

その後、新潟水俣病の舞台となった阿賀野川に生きる人びとを描いたドキュメンタリー映画『阿賀に生きる』(佐藤真監督)の撮影担当を機に郷里の新潟にもどって16年が経ちます。地方にいて、カメラマンの仕事をするだけでは気がとおくなるばかりです。いつか、撮影を兼ねた監督作品も作るようになっていました。

映画になるのかどうか。どんな映画にすればいいのか。第二びわこ学園を久しぶりに訪ねました。いっしょに琵琶湖を歩いた人たちの髪に白いものが混じり顔にしわが刻まれていました。ショックでした。私が生きたと同じ時間を、彼らも生きていました。あたりまえのことです。でも、私は忘れていたのです。

第二びわこ学園に泊り込みました。開設時に入所した10歳前後の子どもたちは40代から50代になっていました。加齢にともない障がいが増えてきている人も多い。3歳から70歳の入所者121人のうち4割以上の人が30年以上ここで暮らしていました。人工呼吸器をつけた子どもたちに初めて出会いました。家族会もありました。知らないことが多すぎました。

「カメラを回しながら考えるしかない」。しかし、クランクインを目前にして病に倒れました。救急車。左半身不随。脳梗塞。右手は動く、カメラは持てるか。ゆっくりと時間が流れました。少しずつ回復してゆく喜び。復帰の不安。PTSD(心的外傷後ストレス障害)が強く残りました。

この映画を撮影する前に、病と障がいをもった側からみた世界を体験するように与えられた試練のように思いました。自分の気持ちを伝えられないことがどんなに苦しく悔しいことか。また、人は障がいがあっても動くところならどこを使ってでも表現したいものであると実感しました。

2002年10月、運動会からクランクイン。カメラが回る音が心臓の鼓動のように聞こえました。(クランプアップ2004年4月、完成9月)

## 製作体制

この映画の製作をどうしたらいいのか、悩みました。

『わたしの季節』製作委員会(代表山崎正策びわこ学園理事長)を立ち上げ、びわこ学園の皆様のご理解とご協力をいただくとともに、50人ほどの映画製作協力賛同者の呼びかけのもと、多くの方々から製作資金の協力を仰ぐという方法をとりました。

一人では何もできません。スタッフも苦労覚悟で集まってくれました。プロデューサーと録音に、前から私の作品の仕上げをしてくださっている協映の田辺信道さん。撮影助手には昨年『掘るまいか』(橋本信一監督)の撮影で高い評価を得た松根広隆さん。そして助監督には前作『こどものそら』の学童保育所の指導員だった吉田泰三さん。企画取材に酒井充子さんが入ってくれ、文化庁の支援もいただきました。音楽制作は川村年勝さん。主題歌はブラジル在住の青木カナさんです。

今回は16mmフィルムを使って、スタッフの力を決集した作品にしたいと思いました。

また、障がいを持つ一人ひとりの「存在感」を浮き上がらせることを大きなテーマとしましたので、それにはフィルムの質感が合っていると考えたからです。製作費は少なく、苦労するならフィルムでというカメラマンのこだわりだったかもしれません。

この映画の編集にあたっては、私が監督と撮影を兼ねていることから、客観的な目がほしくて、『阿賀に生きる』の佐藤真監督と感性豊かな秦岳志さんに編集をお願いしました。お二人のご尽力はすばらしく、この映画を広い世界に解き放つ作品へと導いていただいたと思っております

また、田辺さんの現場録音がすばらしく、思い切ってナレーションなしの作品にしました。できるだけ、映画に登場する不思議な人びとと直接会ってもらいたかったのです。

## 映画の現場から

現像所からあがったばかりの音もないラッシュフィルムを学園で映写し、関係者と論議を深めながら進めました。撮影スタッフが気づかない側面が語られます。また、「日常の忙しさにかまけて、見過ごしている点がたくさん見えてくる」とは職員側の弁です。利用者の人たちにもラッシュは公開されました。

撮影中のエピソードを第二びわこ学園の地域交流誌「紙ひびき」に連載しました。ここでは簡略にご紹介します。

### < 粘土と自由 >

利用者の人たちが粘土をする様子を写したフィルムを何回も何回も観ながら、わたしにはその様子が不思議に思えてきた。粘土に自分の思いのたけをぶつける。

形にとらわれることなく、粘土そのものと会話しているように思えるのである。

「作品は、彼らが土と遊んだ残りカスみたいなもんです」と粘土室担当の人はいふ。粘土そのものと戯れることができる彼らの心の自由。それが映画に写ってほしい。

私も「映画」という「粘土」といかに自由に遊べるか、と問われているように思えてならない。「かたち」ととられず、わたしという一人の人間のところが宇宙に漂流するように、ただそこに在るような映画。

### < シャモジと仏さまの手 >

窓際のカーテンと戯れながら、シャモジを両手に持ち床を叩いているA(54)さん。自傷のため視力は失われた。

わたしはAさんを撮影することにためらいがあった。自傷による傷痕の痛々しさもさることながら、私とAさんとの間に心の通い合う道を見つけられなかったのである。

ある日のお茶の時間。Aさんに「お茶ですよ」と声をかけたときである。Aさんはむっくと起き上がり、すっとわたしの前に静かに両手をそろえ差し出したのである。わたしがその両手に茶碗を置くと、両手で包みこみ拝むように口に運んだ。それはまるで茶室で茶をいただいているようにも、仏者の托鉢の姿にも見えたのである。その美しい姿が目には焼きついた。Aさんを撮影できるようになった自分を感じた。密着したレンズがAさんの心の奥底に届くように祈りながら長くカメラを回した。

### < 大輔くんの成長 >

第二びわこ学園にきて、はじめて、ファンファングループのように、障がいの重い子どもたちに出会った。気管切開をしたり人工呼吸器をつけたりしている。通常の会話はできない。

その中のひとり、大輔くん。その様子が「紙ひびき」に掲載されたお母さんの詩で紹介されている。

「地球を体験」 大輔・母

3月24日 生後一ヶ月から

8年を過ごした 大学病院をはなれ  
派手な救急車に乗って やってきました  
地球という 未知の星へ

呼吸ができない大輔は  
ほとんどの時間を 白い壁の中で  
ひとり テレビだけを楽しみに  
過ごしてきました

空が 広くて 青いこと  
風は 素肌に 心地良いこと  
木々は 季節で 彩を変える  
そして、人は 皆 あったかいのよ

せっかく人間に 生まれてきたんだもの  
地球のいいところ 感じて ほしい  
ここ びわこ学園には それが  
いっぱい あるから・・・・・・・・

映画の準備をしているとき、この詩は私の脳裡にやきついた。

そして、クランクイン直前の昨年5月私は脳梗塞で倒れたのである。ストレッチャーに乗って病院内を移動したとき、蛍光灯きらめく天井が目映った。

「大輔くんたちは、こんなふうに見えるのか」と思った。

幸い回復し、彼らの八幡養護学校野洲校舎への登校を撮る。カメラはストレッチャーから見た風景である。長い廊下から外へ出た瞬間、まぶしい太陽がレンズにあたり、真っ白くなった。少しすると目が慣れ、青い空と白い雲が浮かび上がったのである。

「空が広くて青いこと」というお母さんの詩が現実のものとなっていることに、私は感動を覚えた。

#### <長い時間>

学園に残されている昔の白黒の8mmフィルム。服装、風景、のんびりした空気感。40年という時間が漂う。

人の成長は人間的社会的広がりをもとめるのが道理である。しかし、それを保障する制度も、また、「障がい」とともに受け入れようとする社会の経験もまだまだ少ない。

「自分が死んでも子どもが生きていけるように」と願う純粋な親たちの気持ちさえ、ときには変化を望まない力となって子どもに働くこともあるのである。

そういう状況の中で自己の確立を形成する困難さを想像してほしい。幼いときから親元を離れ、「施設」に40年暮らすという意味を考えないわけにはいかない。自己の確立と、これらの壁に挟まれ、悶え苦しむ姿をたくさん見てきた。映画のひとつの主題のように思える。

#### いのちの根源をみつめる映画

大地から芽吹くように人は生まれ、  
春夏秋冬と季節がめぐるように人は生きてゆく。  
生きてゆく喜びと、生きてゆく苦しみの間に、  
それぞれの人生がある

この言葉とともに始まる『わたしの季節』は、人としての「存在感」と「こころの声」を掘り所に、深いところでいのちの根源を見つめた映画です。けっして障害を持つ人びとが社会の中でどう処遇されるべきか、ということを問うた映画ではありません。ただ、ひたすらに、映画に登場する人びとと直（じか）に対面してくれることを願っています。

しゃもじで床をリズムカルに叩いている人。ビリビリと新聞紙を裂く人。どろどろ粘土を自分の顔に塗りたくる人。その理由を<解説>できようもなく、ナレーションはありません。ピアノを弾く人、進行性の病気を抱えた人、自分たちの気持ちを「ゆっくり話を聞いてほしい」と切望する人・・・ベッド生活、入浴、散歩。学園の日常が映し出されます。

人工呼吸器を装着している少年。彼の気持ちを汲みとりたいと願う母親。より自立的な生活を目差して施設を替わろうと考えている電動車イスの男性と80歳を越した父親との葛藤。「弟がいなければと考えたこともある」と告白する兄と弟の50年。2004年3月1日、第二びわこ学園新築・移転。また、新しい季節が始まろうとしています。

重い障害をもつ人もまた、生まれ生きています。同じです。しかし、生きる困難さは同じではありません。深いところでのいのちの根源を見つめています。そのことが、「存在感」を強くするのではないのでしょうか。人はその「存在感」にふれると、励まされ、癒されます。自らのいのちの根源に糸を垂らすからでしょう。どんなにか多くの人びとが、この人たちから生きる勇気と自己変革のエネルギーをもらったことでしょう。

人が生きていくためには「あなたはあなたとして生きていい」という絶対肯定の水脈が必要です。生きることに對等な価値観。生きるとはなにか。自分の存在とはなにか。自己変革の細い道がこの水脈に通じているように思えます。この水脈はだれにとっても必要な生命の源なのではないのでしょうか。人はだれでも、「あなたはあなたであっていい」という言葉を求めています。しかし、自らに発することはむずかしい。でも、人に発した瞬間、波のように自分にはねかえってくる言葉のような気がします。「いのちの循環」と言いかえてもいい。私たちはこの循環のなかでお互いが生かされているのではないかと思います。

この映画は、「いのちの循環」が底流に横たわるような映画であってほしいと思います。そして、映画を観た人びとに一瞬の光のまたたきを見せてほしいと願っています。

音楽が人びとの心に染み透るように、映画が映画として自らの道を歩み始めたとき、きっと私たちは多くのことに気づかされ、映画から新たなもう一人の自分を発見することでしょう。

最後に、カメラの前に生身の姿をあらわされたみなさま、そして、この映画にかかわられた多くの方々に敬意を表します

この映画が多くの人びとにご覧いただけることを願ってやみません。